



Title	＜翻訳＞アルムアッラカート試訳（Ⅲ）：ズハイル
Author(s)	池田， 修
Citation	アラブ・イスラム研究. 2006, 5, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105869
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アルムアッラカート試訳 (III)

——ズハイル——

池田 修*

1.

この詩人の名前は **زُهَيْرُ بْنُ أَبِي سُلْمَى رَبِيعَةَ بْنِ رَبِيعٍ بْنِ قُرَّةَ الْمُزْنِيِّ** Zuhayr b. ʿAbī Sulmā Rābiʿa b. Riyāḥ b. Qurra al-Muznī (c. 530-627) である。『歌の書』¹⁾では、Riyāḥ のところが **رَبَاح** Rabāḥ となっている。この名の通り、彼は **مُزْنَةُ** Muzna 族の一員であった。父の時代、**بَنُو عَبْدِ اللَّهِ بْنِ غَطَفَانَ** Banū ʿAbd Allāh b. Ghatafān 族、および父方の叔父たちのいる **بَنُو مُرَّةَ الدُّبْيَانِ** Banū Murra al-Dhubyān 族の居住区で生まれ育った。それはメディナ東方のネジドの **الْحَاجِرِ** al-Ḥājir という土地であった。

彼の一族は多くの詩人を輩出していることで有名である。彼を保護した叔父の **بَشَامَةُ بْنُ الْغَدِيرِ** Bashāma b. al-Ghadīr は、詩人であるとともに部族の裕福な指導者でもあった。また、彼の二人の姉妹 **سُلْمَى** Sulmā と **الْخَنْسَاءُ** al-Khansāʾ もよく知られた詩人である。彼の二人の息子、**كَعْبُ بْنُ زُهَيْرٍ** Kaʿb b. Zuhayr (d.c. 645) と **بُجَيْرٍ** Bujayr も、また孫の **عُقْبَةُ** ʿUqba、曾孫の **الْعَوَّامُ** al-ʿAwwām も名の通った詩人であった。ズハイルは息子たちに詩を教えたのみならず、他の者達にもこれを教えた。なかでも有名なのは **الْحُطَيْئَةُ** al-Ḥuṭayʿa (d.c. 678) である。

ズハイルの母 **أُمُّ عَمْرٍو** ʿUmm ʿAmr は夫の死後、**تَمِيمٍ** Tamīm 族の有名な詩人 **أَوْسُ بْنُ حَجَرَ** ʿAws b. Ḥajar (530-620) と再婚しているが、ズハイルはこの詩人に師事して、その **رَاوٍ** rāwī となった。al-Ḥuṭayʿa はズハイルの rāwī を務めていた。ズハイルの影響はウマイヤ朝中期に活躍して、アラブのプラトニック・ラブを詠んだ **جَمِيلٍ** Jamīl (d. 701) や **كُثَيْيِرٍ** Kuthayyir (660-723) にまで及んでいると言われている。

ズハイルは少なくとも二人の女性と結婚している。一人はムアッラカに登場する **أُمُّ أَوْفَى** ʿUmm ʿAwfā である。二人の間には何人かの子がうまれたが夭折したらしい。そこで彼女とは離婚して、**غَطَفَانَ** Ghatafān 族の **كَبْشَةَ بِنْتُ عُمَارٍ** Kabsha bint ʿUmmār という女性と結婚し、Kaʿb と Bujayr と **سَلِيمٍ** Salīm の三人の息子を得たが、Salīm は幼くして没した。

ズハイルは、部族の有力者であった **Bashāma b. al-Ghadīr** (前出) の遺産の一部を相続したり、彼が褒め称えた部族の有力者などからふんだんに金品を与えられ、裕福な人生を送った。ために、自己の詩才を発揮するために有力なパトロンを求めて各地を渡り歩く必要がなかった。養育された **Ghatafān** 族のスポークスマンとして活躍しておればよかった。かくして、彼はジャーヒリーヤ時代の部族社会において、詩人が果た

* 四天王寺国際仏教大学 客員教授

1) **أَبُو الْفَرَجِ الْإِسْطَهَانِيُّ** ʿAbū al-Faraj al-ʿIṣṭahānī (897-c. 972), **كِتَابُ الْأَغَانِي** Kitāb al-Aghānī.

す政治的役割を提示した典型的な存在となっている。酒や女との冒険や自己の武勇などを詠んだ *إِمْرُؤ الْقَيْسِ* Imru' al-Qays (c. 500-540)²⁾ や *طَرْفَة* Tarafa (c. 543-569)³⁾ とは趣を異とし、部族間闘争の悲惨さを説き、和平実現を訴えている。

ズハイルは長命を保ち、イスラーム時代になるまで生き、100歳に達したという説もあるが、おそらくその前、90歳代で没したと推測される。

Ibn Qutayba の『詩と詩人達』⁴⁾(p.17)によると、詩人には天賦の才能と、長時間工夫に工夫を重ねて詩作する者の二種があり、ズハイルやその弟子 al-Ḥuṭay'a は後者である。al-ʿAṣmaʿī (c. 740-828) はこの派の詩人達を「詩の奴隷達 (عَبِيد الشَّعْرِ *ʿabid al-shiʿr*)」と呼んでいる。彼らにとって最高の詩とは *حَوْلِيّ* *hawli* (*حَوْل* *hawl* は「一年」)。つまり、熟考と推敲を重ねて一年がかりで作った詩) であるという主旨のことを述べている。事実、ズハイルは自らの詩集を *حَوْلِيَّات* *hawliyyāt* と呼んでいる。

2.

ズハイルが *مُعَلَّلَة* *muʿallaqa* を詠むにいたった背景には、*عَبْس* *ʿAbs* 族と *ذُبْيَان* *Dhubyān* 族との間で争われた「*دَاهِس* *Dāḥis* と *الْغُبَرَاء* *al-Ghabrāʾ* の日」で知られる戦争と、その終結があったと伝えられている。その争いのあらましは以下の通りである。

ʿAbs 族の長 *قَيْسُ بْنُ زُهَيْرٍ* Qays b. Zuhayr は *Dāḥis* という名の駿足の雄馬を持っていた。これに対して、*Dhubyān* 族の長 *حُذَيْفَةُ بْنُ بَدْرٍ* Ḥudhayfa b. Badr は *al-Ghabrāʾ* という、同じく足の速い雌馬を所有していた。両者は互いに持ち馬の自慢をしい、挙句の果て、100 *غَلْوَة* *ghalwa* (1 *ghalwa* は弓の一射程の距離) のコースで競馬をし、100頭のラクダを賭けた。

この競馬では最初、*al-Ghabrāʾ* のほうが先んじたが、やがて砂地が広がるあたりになり、雄馬 *Dāḥis* が追いつき、追い越しゴールへと近づいた。ところが *Dhubyān* 側は、あらかじめ人を出して待ち伏せさせ、やって来た *Dāḥis* をコースから外れさせてしまった。ために、*al-Ghabrāʾ* がゴールインしてしまった。

ʿAbs 族の Qays はこのいかさまを知ると、賭けたラクダ100頭の引渡しを求めた。しかし *Dhubyān* 族はこれを拒み、一頭のラクダも渡さなかった。これに憤慨した ʿAbs 族は、*Dhubyān* 族長の兄弟を暗殺した。兄弟を殺された *Dhubyān* 族長 Ḥudhayfa は、Qays の兄弟 *مَالِك* *Malik* を殺害して、復讐した。これがもつて、両部族は約40年間戦いを続けることになった。それはおよそ568~608年頃のこととされている。約40年というのは、長期にわたってという程度に受け止めればよいであろう。

さて、この戦いは、*Dhubyān* 族の氏族 *Banū Murra* の有力者 *الْحَارِثُ بْنُ عَوْفٍ* *al-Ḥārith b. ʿAwf* と *أَبِي حَارِثَةَ* *al-Hārith b. ʿAwf* と *هَرِمُ بْنُ سِنَانَ* *Harim b. Sinān* の両名が、両軍の戦死者らへの血債として、ラクダ3000頭を3年間にわたって提供する。双方は

2) 池田修「アルムアッラカート試訳 (I): イムルウルカイス」『関西アラブ・イスラム研究 第3号』(2003年)を参照。

3) 池田修「アルムアッラカート試訳 (II): タラファ」同『第4号』(2004年)を参照。

4) *ابن قُتَيْبَة* Ibn Qutayba (d. 889), (*أَوْ الشَّعْرُ وَالشَّعْرَاءُ*) *Ṭabaqāt al-Shuʿarāʾ* (*ʿaw al-Shiʿr wa al-Shuʿarāʾ*).

戦死者の数に応じてこれを受け取る、などの条件で和平を提案した。両陣営はこれを受け入れて、和平を約束した。

しかし、この段になって、和平協定が頓挫しかねない事件が起こった。Dhubyān 族に حُصَيْنُ بْنُ ضَمَضَمٍ Ḥuṣayn b. Ḍamḍam という男がいた。彼の父 Ḍamḍam は ‘Abs 族の英雄で、*mu‘allaqa* 詩人でもある عَنْتَرَةُ بْنُ شَدَّادٍ ‘Antara b. Shaddād (c. 525-615) に殺され、また彼の兄弟 Harim は同じく、‘Abs 族の غَالِبُ Ghālib 家の وَرْدُ بْنُ حَابِسٍ Ward b. Hābis に殺された。Ḥuṣayn はこれを恨み、Ghālib 家の Ward、またはこの縁者を殺すまでは顔を洗わない、と密かに誓っていた。‘Abs 族と Dhubyān 族はすでに有力者二名の仲介で和平を実現して、互いに交流するようになっていた。

ある日のこと、‘Abs 族のある男が Ḥuṣayn のテントを訪れた。彼は客にあれこれと尋ね、それが狙っている Ghālib の縁者だと知り、早速殺してしまった。

これを知った ‘Abs 族は憤慨して、和平の仲介者 al-Hārith のテントに向かって集結した。al-Hārith は Ḥuṣayn 同様、Dhubyān 族の氏族 Banū Murra の血縁者でもあった。事の重大さに気づいた al-Hārith は、息子に100頭のラクダを授けて ‘Abs 族のもとへ派遣し、「ラクダを受け取るか、それとも命をかけるか」と問わせた。

結局、‘Abs 族はラクダを受け取り、復讐戦の矛を収めた。こうして和平を確かなものにした仲介者の名声はさらに高まった。

3.

ズハイルの *mu‘allaqa* はこの戦争の後作られたもので、和平実現を達成した有力者を賞賛し、Ḥuṣayn b. Ḍamḍam の起こした事件にも言及している。一般的に言って、略奪戦や復讐戦を正当化し、これらを賞揚する詩人が多いなかで、ズハイルという詩人は、戦争の惨禍を訴え和平を希求している点で、ジャーヒリーヤ時代の稀有な存在である。

ここに訳したズハイルの長詩は、[م] *mīm* を脚韻とした طَوِيلٌ *tawīl* 調の قَصِيدَةٌ *qaṣīda* で、59行より成り、次のような構成となっている。

- 1) 1行~15行：かつての恋人との住まい跡を訪ねて、思い出に耽る。旅の様子も語る。
- 2) 16行~25行：戦争を終結させるための仲介の労をとった二人の有力者への賛辞。
- 3) 26行~35行：戦争の実態を告発し、‘Abs 族に戦争を避けるよう警告。
- 4) 36行~47行：Dhubyān 族の申し開きと Ḥuṣayn b. Ḍamḍam の事件。
- 5) 48行~59行：格言的な言葉。

以上は今までと同じ資料、التَّبْرِيزِيُّ al-Tibrīzī (1030-1109)、الزَّوْزَنِيُّ al-Zawzanī (d. 1093)、الأَنْبَارِيُّ al-Anbārī (885-940) 等の *mu‘allaqāt* 注釈書、『歌の書』『詩と詩人達』、および A. J. Arberry, *The Seven Odes*、R. A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs* などを参考にした。

فَصِيْرَةٌ زُهَيْرِ بْنِ أَبِي سُُلَيْمٍ

- ١- أَمِنْ أَوْفَى دِمْنَةٍ لَمْ تَكَلِّمْ
 - ٢- دِيَارُهَا بِالرَّقَمَتَيْنِ كَأَنَّهَا
 - ٣- بِهَا الْعَيْنُ وَالْأَرَامُ يَمْشِينَ خَلْفَةً
 - ٤- وَقَفْتُ بِهَا مِنْ بَعْدِ عِشْرِينَ حِجَّةً
 - ٥- أَثْنَا فِي سَفْعَا فِي مُعَرَّسٍ مَرَجَلٍ
 - ٦- فَلَمَّا عَرَفْتُ الدَّارَ قُلْتُ لِرَبْعِهَا
 - ٧- تَبَصَّرَ خَلِيلِي هَلْ تَرَى مِنْ طِعَانٍ
 - ٨- جَعَلَنَ الْقَنَانُ عَنْ يَمِينٍ وَحَزْنُهُ
 - ٩- وَعَالَيْنِ أَنْطَاطًا عِتَاقًا وَكَلَّةً
 - ١٠- ظَهَرَنَ مِنَ السُّوبَانِ ثُمَّ جَزَعْنَهُ
 - ١١- وَوَرَّكَنَ فِي السُّوبَانِ يَعْطُونَ مَتْنَهُ
 - ١٢- كَأَنَّ فُتَاتَ الْعَيْنِ فِي كُلِّ مَوْفِفٍ
 - ١٣- بَكَرْنَ بُكُورًا وَاسْتَحَرْنَ بِسُحْرَةٍ
 - ١٤- فَلَمَّا وَرَدَنَ الْمَاءَ زُرْقًا جَمَامُهُ
 - ١٥- وَفِيهِنَّ مَلَهَى لِلطَّيْفِ وَمَنْظَرٌ
 - ١٦- سَعَى سَاعِيَا غَيْظٍ بِنِ مَرَّةٍ بَعْدَمَا
 - ١٧- فَأَقْسَمْتُ بِالْبَيْتِ الَّذِي طَافَ حَوْلَهُ
 - ١٨- يَمِينًا لِنَعْمِ السَّيِّدَانِ وَجِدْتُمَا
 - ١٩- تَدَارَكْتُمَا عَبَسًا وَذَيَّانَ بَعْدَمَا
 - ٢٠- قَدْ قُلْتُمَا إِنْ نُدْرِكَ السَّلَامُ وَاسْعَا
 - ٢١- فَأَصْبَحْتُمَا مِنْهَا عَلَى خَيْرِ مَوْطِنٍ
 - ٢٢- عَظِيمَيْنِ فِي عَلِيَا مَعْدٌ هُدَيْتُمَا
- بِحَوْمِ أَائَةِ الدَّرَاجِ فَلَمَّ تَسَلَّمَ
مَرَّاجِعُ وَشَمِ فِي نَوَاشِرِ مِعْصَمِ
وَأَطْلَاؤُهَا يَنْهَضْنَ مِنْ كُلِّ مَجْتَمِ
فَلَأِيًّا عَرَفْتُ الدَّارَ بَعْدَ تَوَهُمِ
وُؤْيَا كَجَذَمِ الْخَوْضِ لَمْ يَسْتَلِّمْ
أَلَا أَنْعَمَ صَبَاحًا أَيُّهَا الرُّبْعُ وَاسْلَمِ
تَحْمَلُنَ بِالْعَلِيَاءِ مِنْ فَوْقِ جُرْثَمِ
وَكَمْ بِالْقَنَانِ مِنْ مُحِلٍّ وَمُحْرَمِ
وَرَادَ الْخَوَاشِي لَوْنُهَا لَوْنُ عِنْدَمِ
عَلَى كُلِّ قَبِيٍّ قَشِيبٍ وَمُفْنَامِ
عَلَيْهِنَّ دَلُّ النَّاعِمِ الْمَتْنَعَمِ
وَقَفْنَ بِهِ حَبُّ الْفَنَاءِ لَمْ يُحْطَمِ
فَهُنَّ وَوَادِي الرُّسِّ كَالْيَدِ لِلْفَمِ
وَضَعْنَ عَصِيَّ الْحَاضِرِ الْمُتَخَيِّمِ
أَنْيَقَ لَعَيْنِ النَّظِيرِ الْمُتَوَسِّمِ
تَبَزَّلَ مَا بَيْنَ الْعَشِيرَةِ بِالْدَمِ
رَجَالُ بَنُوهُ مِنْ قَرِيْشٍ وَجَرَاهِمِ
عَلَى كُلِّ حَالٍ مِنْ سَحِيلٍ وَمُبْرَمِ
تَفَانُوا وَبَقُوا بَيْنَهُمْ عِطْرَ مَنْشَمِ
عَمَالٍ وَمَعْرُوفٍ مِنَ الْقَوْلِ تَسْلَمِ
بَعِيدَيْنِ فِيهَا مِنْ عُقُوقٍ وَمَأْتَمِ
وَمَنْ يَسْتَبِحُ كَنْزًا مِنَ الْمَجْدِ يَعْظَمِ

٢٠- قَدْ قُلْتُمَا إِنَّ نُدْرِكَ السَّلْمِ وَاسِعاً
 ٢١- فَأَصْبَحْتُمَا مِنْهَا عَلَى خَيْرِ مَوْطِنٍ
 ٢٢- عَظِيمَيْنِ فِي عُلْيَا مَعَدٍّ هُدَيْتُمَا
 ٢٣- وَأَصْبَحَ يُحْدِي فِيكُمْ مِنْ إِفَالِهَا
 ٢٤- تُعْفَى الْكُلُومُ بِالْمِئِينَ فَأَصْبَحَتْ
 ٢٥- يُنْجِمُهَا قَوْمٌ لِقَوْمٍ غَرَامَةٌ
 ٢٦- أَلَا أُبْلِغُ الْأَخْلَافَ عَنِّي رِسَالَةً
 ٢٧- فَلَا تَكْتُمَنَّ اللَّهُ مَا فِي صُدُورِكُمْ
 ٢٨- يُؤَخَّرُ فَيُوضَعُ فِي كِتَابٍ فَيُدْخَرُ
 ٢٩- وَمَا الْحَرْبُ إِلَّا مَا عَلِمْتُمْ وَدُقْتُمْ
 ٣٠- مَتَى تَبْعُثُوهَا تَبْعُثُوا ذَمِيمَةً
 ٣١- فَتَعْرُكُكُمْ عَرَكُ الرَّحَى يَنْفَالِهَا
 ٣٢- فَتُشْنَجُ لَكُمْ غِلْمَانُ أَشْأَمَ كُلُّهُمْ
 ٣٣- فَتُغْلَلُ لَكُمْ مَالاً تُغْلُ لِأَهْلِهَا
 ٣٤- لِحَيٍّ حِلَالٍ يَعْصِمُ النَّاسَ أَمْرُهُمْ
 ٣٥- كِرَامٍ فَلَا ذُو الضَّعْفِ يُدْرِكُ تَبْلُهُ
 ٣٦- رَعَوْا ظِمَاءَهُمْ حَتَّى إِذَا تَمَّ أَوْرَدُوا
 ٣٧- فَقَضَوْا مَنَآيَا بَيْنَهُمْ ثُمَّ أَصْدَرُوا
 ٣٨- لَعْمَرِي لَنَعْمَ الْحَيُّ جَرٌّ عَلَيْهِمْ
 ٣٩- وَكَانَ طَوًى كَشْحاً عَلَى مُسْتَكْنَةٍ
 ٤٠- وَقَالَ سَأُقْضَى حَاجَتِي ثُمَّ أَتَقَى
 ٤١- فَشَدَّ وَلَمْ يُنْظَرْ يُبُوتاً كَثِيرَةً
 ٤٢- لَدَى أَسَدٍ شَاكِي الْبَنَانِ مُقَازِفٍ
 ٤٣- جَرِيءٍ مَتَى يُظْلَمُ يُعَاقَبُ بِظُلْمِهِ
 ٤٤- لَعْمَرُكَ مَا جَرَّتْ عَلَيْهِمْ رِمَاحُهُمْ
 ٤٥- وَلَا شَارَكَتْ فِي الْمَوْتِ فِي دَمٍ نُوْقِلُ

٢٠- 已言及已，安寧之福，其廣無窮。
 ٢١- 故爾等已獲安寧，於此最善之邦。
 ٢٢- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٣- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٤- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٥- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٦- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٧- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٨- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٢٩- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٠- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣١- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٢- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٣- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٤- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٥- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٦- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٧- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٨- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٣٩- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤٠- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤١- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤٢- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤٣- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤٤- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。
 ٤٥- 已獲安寧，於此最善之邦，已獲安寧。

- ٤٦- فَكَلَّا أَرَاهُمْ أَصْبَحُوا يَعْقِلُونَهُ
 ٤٧- وَمَنْ يَعْصِ أَطْرَافَ الزَّجَاجِ فَإِنَّهُ
 ٤٨- وَمَنْ يُوفِ لَا يُذَمُّ وَمَنْ يُفْضِ قَلْبُهُ
 ٤٩- وَمَنْ يَبِغِ أَطْرَافَ الرِّمَاحِ يَنْلُتُهُ
 ٥٠- وَمَنْ يَكُ ذَا فَضْلٍ فَيُخَلِّ بِفَضْلِهِ
 ٥١- وَمَنْ لَا يَزِلُّ يَسْتَرْحِلُ النَّاسُ نَفْسَهُ
 ٥٢- وَمَنْ يَغْتَرِبُ يَحْسِبُ عَدُوًّا صَدِيقَهُ
 ٥٣- وَمَنْ لَا يَذُدُّ عَنْ حَوْضِهِ بَسِلَاحِهِ
 ٥٤- وَمَنْ لَمْ يُصَانِعْ فِي أُمُورٍ كَثِيرَةٍ
 ٥٥- وَمَنْ يَجْعَلِ الْمَعْرُوفَ مِنْ دُونِ عِرْضِهِ
 ٥٦- سَمِئْتُ تَكَالِيفَ الْحَيَاةِ وَمَنْ يَعِشْ
 ٥٧- رَأَيْتُ الْمَنَايَا خَبَطَ عَشَوَاءَ مَنْ تُصَبُّ
 ٥٨- مَهْمَا تَكُنْ عِنْدَ أَمْرٍ مِنْ خَلِيقَةٍ
 ٥٩- وَأَعْلَمُ مَا فِي الْيَوْمِ وَالْأَمْسِ قَبْلَهُ
 صَحِيحَاتِ أَلْفَ بَعْدَ أَلْفِ مُصَتَّمٍ
 يُطِيعُ الْعَوَالِي رُكِبَتْ كُلُّ لَهْذَمٍ
 إِلَى مُطْمَئِنَّ الْبِرِّ لَا يَتَجَمَّجِمُ
 وَلَوْ رَامَ أَنْ يَرْقَى السَّمَاءَ بِسُلْمٍ
 عَلَى قَوْمِهِ يُسْتَعْنَى عَنْهُ وَيُذَمُّ
 وَلَا يُعْفَى يَوْمًا مِنَ الذَّمِّ يَنْدَمُ
 وَمَنْ لَا يَكْرُمُ نَفْسَهُ لَا يُكْرَمُ
 يُهْدَمُ وَمَنْ لَا يَظْلِمُ النَّاسَ يُظْلَمُ
 يُضْرَسُ بِأَنْيَابٍ وَيُوطَأُ بِمَنْسِمٍ
 يَفِرُّ وَمَنْ لَا يَتَّقِ الشَّتْمَ يُشْتَمُ
 ثَمَانِينَ عَامًا لَا أَبَالِكَ يَسَامُ
 ثَمْنُهُ وَمَنْ تُخْطِئُ يُعَمَّرُ فِيهِمْ
 وَلَوْ خَالَهَا تَخْفَى عَلَى النَّاسِ تُعْلَمُ
 وَلَكِنِّي عَنْ عِلْمٍ مَا فِي غَدٍ عَمُ

- 1- ウンム・アウファーが住んでいたテントの黒くなった物言わぬ跡形が、アッドラージとアルムタサッリムの荒地に未だ残っているだろうか。
- 2- 彼女がアツラクマターンに住んでいたテントの跡は、手首の腱の上に繰り返しやり直された刺青のようである。
- 3- そこを、ぱっちりした目の野牛や真っ白なカモシカの群れが次から次へとさすらい、その乳飲み子らが各自の臥所から起き出して (乳を求める)。
- 4- 私は20年たったあと彼女が住んでいたテントの跡に立っている。苦しみぬき、考え抜いた末、これが彼女の住まい跡だと分かった。
- 5- 私は大鍋を掛けた黒ずんだ鼎石と住まいをめぐる (水捌けようの) 溝を認めたが、それは水槽の底のようでまだ割れていなかった。
- 6- 私は住まい跡を確かめると、「おお、住まいよ、おはよう。無事で何より」と声をかけた。
- 7- 友よ、見たまえ。駕篋に乗った婦人らがジルスムの水路に沿った高台を旅して行く姿が見えないか (私は20年前にその姿を見たのを今思い出して、感極まり泣くのである)。
- 8- 彼女らはアルカナーン山を右にして、石ころの多い荒地を通って行く。アルカナーンには、なんと多くの敵や味方が住んでいることか。
- 9- 彼女らは乗り駕篋に高価な布と薄いヴェールを掛けているが、その縁はバラのように赤く、アンダム (流血樹) の色合いそのままである。
- 10- 彼女らはアッスパーンの谷間から出発してカイナ族の新しくてゆったりしたラ

- それはあたかも弾けていないイヌホオズキの種のように赤かった。
- 13- 彼女らは早朝に起き、夜明けとともにアツラツスの谷あいを目差して出立するが、手を口に当てるのを間違えないように、道を誤ることはない。
- 14- やがて、澄み切った青い水が満ちた水場に着くと、杖を置いて留まるが、あたかも住むためにテントを建てる者のようである。
- 15- 彼女らには、優雅な者にとって楽しみどころがあり、美しいものを眺める者達の目を驚かさず見事な風情がそなわっている。
- 16- ガイズ・ブヌ・ムツラ族の二人の調停者⁵⁾が和解のために努めた。それは一族の協約が流血事件のため破られた後のことである。
- 17- 私は、クライシュ族とジュルフム族の男達が建立して、その周りを巡回する神殿⁶⁾にかけて誓った。
- 18- 誓って言うが、あなたがたお二人はなんと良き族長であることよ。あらゆる場合に、単糸や振れた網のような難易いずれの問題も解いたのである。
- 19- あなた方は、大規模な殺戮とマンシム⁷⁾の香料が大量に砕かれた後、アブス族とズブヤーン族の抗争を鎮め、関係を修復した。
- 20- そして、あなた方は、「十分な資金と適切な言葉でもって、広範な和平を達成できれば、我々は救われるであろう」と申された。
- 21- 和平達成により、あなた方のお立場は最善のものとなった。すなわち、手に負えない反抗や罪惡から遠く隔てられたのである。
- 22- あなた方はマアド (北アラブ) の最高位の偉人となった。願わくば正しく導かれたまえ。栄光の宝を正当に得たものはまことに偉大である。
- 23- あなた方の遺産のなかから、あらゆる戦利品が人々の間に行き渡った⁸⁾。耳に印の切れ込みの入った若い多くのラクダが駆り立てられた。
- 24- 戦傷は、何百頭ものラクダを供されたため癒された。それは、戦闘に加わらなかった者⁹⁾が分割して支払った血債である。
- 25- ラクダは部族から他の部族へ賠償金として分け与えられ、両者の間ではコップ一杯分の血も流されなかった。
- 26- とまれ、連合部族およびズブヤーン族に私の言葉を伝えてくれ、「あなた方は違反しないと固く誓ったか」と。
- 27- あなた方の胸のうちに秘めている裏切り心を、露見しないと思ってアッラーに隠してはならない。アッラーは隠し事をすべて知り給う¹⁰⁾。

5) 二人の調停者につき al-Tibrīzī は、الحَارِثُ بْنُ عَوْفٍ al-Hārith b. 'Awf と هَرِمُ بْنُ سِنَانَ Harim b. Sinān、または前者と خَارِجَةُ بْنُ سِنَانَ Khārijah b. Sinān のことだとしている。

6) 「神殿 (الْبَيْتُ al-bayt)」とはメッカのカアバ (الْكَعْبَةُ al-Ka'ba) 神殿のこと。

7) مَنْشِمٌ Manshim は、香料を商っていた女性の名前。人々は同盟の誓いをする祭、香料を手塗る。また、死者が出ると、それを死体に塗るのが慣わしであった。つまり、多数戦死者が出たことを表している。

8) al-Anbārī は上の句を、「あなたが若いラクダに駆り立てられた」としているが、al-Zawzanī によって訳した。

9) 戦闘に加わらなかった者とは、註1) に挙げた二名のこと。

10) ムハンマドがイスラームを説く少し前に没したとされるズハイルが、全知なる神をとりあげ、さらに精算の日 (يَوْمَ الْحِسَابِ yawm al-hisāb) などの表現をしている点は注目される。特に28行は、コーラン第25章第68節、第69節「このようなことを行う者は罪の報いを受け、復活の日

- 28- 裏切り心を隠すことは、先延ばしとされて、帳簿に記され、精算の日まで報復猶予となるか、早々と罰が加えられるか、いずれかとなる (いずれにしても、神の懲罰から逃れることは出来ない)。
- 29- 戦争とは、あなたがよく知り、苦渋を味わったものに他ならない。すなわち、憶測で語るでまかせの話ではない。
- 30- あなた方が戦争を起こせば、非難されるべき惨事を起こしたことになる。戦争は、掻き立てれば、ますます激しく燃え上がるものだ。
- 31- 戦争は石臼が穀物を敷布の上で挽くようにあなた方を粉碎する。まるでラクダが毎年孕み生みに生み果ては双子を産むように (戦争は多くの災難をもたらす)。
- 32- 戦争はあなた方に凶運の子らを生む。彼らはすべてアフマル・アード¹¹⁾のようで、戦争が授乳し、やがて離乳させる。
- 33- 戦争はあなた方に、イラクの村々が住民に産み出す穀物や銀貨とはまったく異なる産物をもたらす。
- 34- 和やかに暮らしている部族の威力が、ある夜、大事が起こったとき、人々を守るのである。
- 35- 気高い部族に対しては、復讐者も報復できず、彼らに罪を犯した亡命者も見捨てられることはない。
- 36- 彼らはラクダにひと時草を食べさせ¹²⁾、喉が渇くと深い水場に赴くが、そこでは武器と血が湧き出る (一時戦うのをやめた後、再び戦闘を始める)。
- 37- 彼らは互いに殺し合い、ラクダを再び、体に障る消化の悪い牧草地へ連れ戻す¹³⁾ (殺し合いの後、次の戦闘の準備をする)。
- 38- 私は命をかけて誓う、「彼らはまことに立派な部族である。その彼らに対して、フサイン・ブヌ・ダムダムが的外れの敵意を抱いて、非道を働いた」。
- 39- 彼は憎悪の念を胸に秘めたまま表情に表さず、(機会が訪れるまでは) 手を出そうとしなかった。
- 40- 彼は心中で、「俺は思いを遂げる。くつわをはめた千騎の武者を率い、敵からわが身をまもる」と言った。
- 41- かくして彼は (兄弟を殺した) 男を殺害した。しかし、死が (人生の) 荷袋を投げ下ろしたところの者以外の幾多の、家々を恐れさせはしなかった¹⁴⁾ (復讐相手だけを倒しただけにとどまった)。
- 42- 完全武装し、百戦錬磨で固いたてがみを立て短く切られていない鉤爪を持つライオン¹⁵⁾ (のようなフサイン・ブヌ・ダムダム) の住まいで。

には懲罰は倍加され、屈辱にまみれてそこに永遠に留まる」の聖句を思わせるものである。

- 11) أَحْمَرُ عَاد Ḥamar ʿĀd は أَحْمَرُ ثَمُود Ḥamar Thamūd を格調の都合で言い換えたもの。彼は、コーラン第11章第64節、第65節、第66節で語られているアラブの預言者 صَالِح Ṣāliḥ に下された神聖雌ラクダを殺して、彼の民が神の懲罰を受けた話を知っていたことになる。ラクダを殺したのは Ḥamar Thamūd こと قُدَّارُ بْنُ سَالِفٍ Qudār b. Sālif という者。この一行は、戦争が産み出す子らの凶運は Ḥamar Thamūd がもたらした凶運に似て、父母らをも不運に落とすと訴えたものか。
- 12) 「ひと時草を食べ」とは一時戦いをやめることを、また「深い水場」とは戦争を喻えたもの。
- 13) 「消化の悪い牧草地へ連れ戻す」とは、戦いをいったん休止して、次の戦いの準備をすることを暗示している。
- 14) 「復讐する相手だけを倒した」の意。
- 15) ここでの「ライオン (أَسَد ʾasad)」はすべて حُصَيْنُ بْنُ ضَمَضَمٍ Ḥuṣayn b. Ḍamḍam を指す。

- 43- 勇敢で襲われれば、直ちに反撃して懲らしめる。さもなければ、襲われる前に悠然と攻撃に移るライオン (のようなフサイン・ブヌ・ダムダム)。
- 44- あなたの命に誓って言おう、「彼らの槍が繰り出されてイブン・ナーヒクやアルムサッラムで殺された者の血を流したのではない」。
- 45- 彼らの槍は、ナウファルやワハブやイブン・アルムハッザムの血を流し殺害したことになんら関与していない。
- 46- 私が見るところ、(戦争に加わらなかった) すべての人々が各自で血債を支払った。千頭きっかりのラクダの後、さらに健全なラクダ千頭を¹⁶⁾。
- 47- 槍の鉄やじりに従わぬ者は誰でも、その柄の先に取り付けられた鋭い穂先に服する。
- 48- 誓約を守る者は非難されない。慈悲心を抱く者は心安んじ、つまりくことはない。
- 49- 槍の穂先にさらされる者¹⁷⁾は、穂先が必ずこれを捕らえる。たとえ梯子段を登って天に逃れようとも。
- 50- 財を成しながら己が民に財を惜しむ者は、無用の者と罵られる。
- 51- 人々に己が欠点をあげつらわせ、一日たりとも非難を免じさせないような者は後悔必定¹⁸⁾。
- 52- 異国に旅する者は敵を味方と思うものだ。自尊心のない者は人々に尊敬されることがない。
- 53- 武器でもって己が水槽¹⁹⁾を守らぬ者は、敵にそれを壊される。人々の攻撃を防がぬものは攻撃される。
- 54- 多事において優しく振舞わない者は、牙に掛けられるか、ラクダの足裏で踏みつけられる。
- 55- 慈善をなす者は名誉を守り、ますます名声を高める。罵りから身を守らない者は罵りを受ける。
- 56- 私は人生の労苦にうんざりした。八十年生きた者には「汝には父なく」、うんざりするものだ。
- 57- 私は、運命は夜盲ラクダのように踏みにじるものだと知った。運命は襲った者を殺し、見逃した者は生き長らえ、老いぼれになる。
- 58- 人の本性は人々には知られていないと思っても、いずれ必ず知られるものだ。
- 59- 私は今日起こったことと、その前の昨日起こったことはよく知っているが、明日何が起こるかはまったく知らない。

16) al-Zawzani は下の句を、「血債用の健全なラクダは山道を、戦死者の家族のもとへと、駆り立てられ、登って行った」としている。

17) al-Anbārī は上の句を、「槍の穂先を望む者は」としているが、ここは al-Zawzani によって訳した。
al-Zawzani: 「死に様を恐れる者でも、死は必ず捕らえる。たとえ梯子段を登って天に逃れようとも」。

18) この一行は al-Zawzani には欠けている。

19) 「水槽 (حَوْضَ ḥawḍ)」とは「聖域」「婦人」などの比喩。